

ゴッタンプロジェクト

ゴッタンの製造技法および基礎資料の
アーカイブと交流ネットワークの創出

「平成30年度伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」

ゴッタンの作り方

伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス

京都市、京都芸術センター

目次

1. はじめに	3
2. ゴッタンとは	4
3. ゴッタンの各部分と名称	6
4. 材料と工具	7
4-1. 各部位に用いる材料	7
4-2. 工具一覧	9
5. 製作工程	12
5-1. 糸倉	12
5-2. 棹作り	18
5-3. 下駒	30
5-4. 胴箱	32
角形・丸型共通	33
角形の場合	37
丸形の場合	51
5-5. 音緒	59
5-6. 糸巻き	61
5-7. 組立てと仕上げ	64
6. 色々なゴッタン	68
7. 平原利秋さんのゴッタンについて	71
8. あとがき	75

1. はじめに

ゴッタンプロジェクト

(正式名称：ゴッタンの製造技法および基礎資料のアーカイブと交流ネットワークの創出、代表：橋口晃一、黒坂周吾)は「平成30年度伝統芸能文化復元・活性化共同プログラム」に採択され、2018年度から2019年度まで、伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(京都市、京都芸術センター)と共同で実施しました。

本プロジェクトは、南九州地方に伝わる弦楽器「ゴッタン」の製作技術の記録、その歴史や音源に関する基礎資料の収集、ゴッタンの演奏者、職人、研究者などの交流を育むことにより、ゴッタンの継承と活性化の一助となることを目指して2018年にスタートしました。

ゴッタンは、江戸時代の初期に日本に伝わった三絃が改良されて三味線になる過程で、薩摩藩内で生まれ、発展・普及した楽器だと言われています。戦前までは、鹿児島県と宮崎県の一部で庶民の生活に根ざした楽器として親しまれていましたが、戦後になると急速にその姿が見られなくなっていきました。1977年に国立劇場で弾き語りをした荒武タミさんという不世出の演奏家の活躍もあって、一部の民俗学者や音楽学者のあいだでは認知されていましたが、ゴッタンと、その伴奏で弾き語る土着の民謡は、今では人々の記憶から忘れ去られつつあります。とりわけ、ゴッタン製造技術の継承が危ぶまれており、現在では数人の製作者だけが、その伝統の技を引き継いでいます。

そこで、今回、宮崎県三股町に「美木工房」を構える上牧正輝さんのご協力の元、ゴッタンの作り方を記録して公開することにしました。上牧さんは、2005年に宮崎県伝統工芸士に認定された名人・黒木俊美さんからゴッタン作りを教わりました。ここに記されているゴッタンの作り方は、上牧さんが黒木さんから学んだ方法に基づいています。南九州の方々のみならず、多くのおみなさまに本書をご活用いただければ、これほど嬉しいことはありません。

2. ゴツタンとは

ゴツタンは形状的には一般的な三味線と基本的には同じですが、「箱三味線」という別名を持っているように、皮ではなく板が胴に張られていることが最大の特徴です。かつては「大工が作る楽器」と言われていました。家を建てた際に、大工が新築祝いにゴツタンを贈るのが習わしだったらしいのです。また、地元の方の話によれば、「使わない木の弁当箱を胴に、割った竹を棹にして釣り糸を弦にして作ったことがある」ということです。つまり、ありあわせの材料で作った遊び道具やジャンクアートのような性格を帯びた手軽な庶民の楽器、それがゴツタンです。

ゴツタンの音について、上牧さんは「三味線をギターに例えるなら、ゴツタンはベースのようなものです」と説明しています。バチではなく指で弾くのが基本で、三味線より低く、柔らかい音です。ゴツタンは単独で演奏するものではなく、伴奏するための楽器だと言えます。ゴツタンは、江戸時代の民謡、語り物などの歌謡文化を背景に発展し、誰でも弾いて楽しめる楽器として広まり、そのなかからプロの演奏者が登場することになりました。いずれも弾き語りを中心だったと言われています。1977年10月、荒武タミさんが国立劇場の「日本音楽の流れ—三弦—」に出演したのも、近世歌謡の正当の後継者としてでした。また、2019年6月に同会場で開催された「日本音楽の流れⅢ 三味線」では、本プロジェクトの共同代表者である橋口晃一と、ミュージシャンの寺原仁太さんがゴツタンの解説と演奏を行いました。

現在でも、ゴツタンは、それが引き立てる歌とともに南九州の人々によって引き継がれています。鹿児島民謡の演奏家・永山成子さん、地元のミュージシャンのサカキマンゴーさんといったプロの奏者だけでなく、地域ぐるみでゴツタン継承へ地道に活動している団体もあります。こうした方々の活動内容については、「ゴツタンプロジェクト」の一環で作成した別の冊子『ゴツタンを語れ！』（2019年3月29日発行）で紹介しています。



サンプルのため省略



5-2. 棹作り

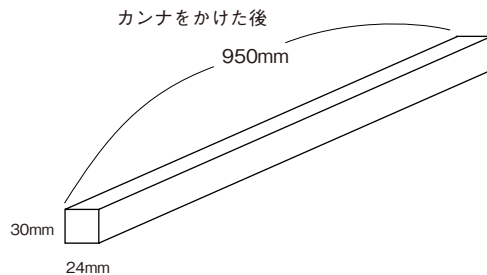
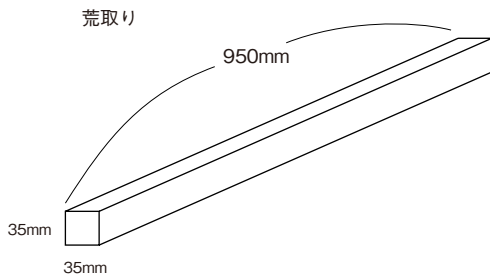
手順1：材料

節がなく筋の通った真っ直ぐな杉材（または檜）を材料とする。80～100年ほど経った古民家の梁や間柱が理想的。また、十分に（1年以上）寝かせて完全乾燥させ、反りが十分出た後のものを使用する。



手順2：荒取り

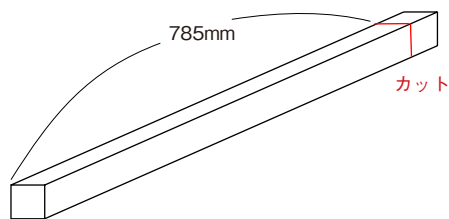
木口35mm角、長さ950mmに帯鋸で荒取りをする。荒取りをしてから十分に（1ヶ月以上）寝かせて反りを出した後で、自動カンナで反りを落す。カンナにかける際には、腹側（膨らんだ方）から反りを落とすこと。自動ガンナで削って最終的に木口を24mm×30mmにする。



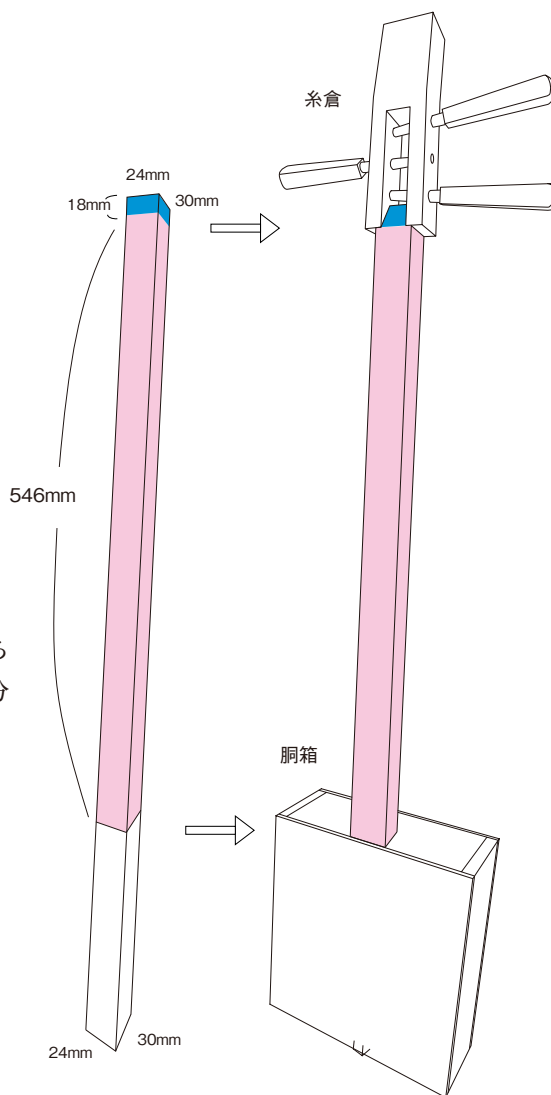


手順3：材料のカットと墨付け

①材料を見極め、筋が一番通った所で785mmの長さにカットする。



②先端から18mmのところ墨付けする。ここが棹の上部に取り付ける糸倉との接着部分（右図の青塗り部分）になる。

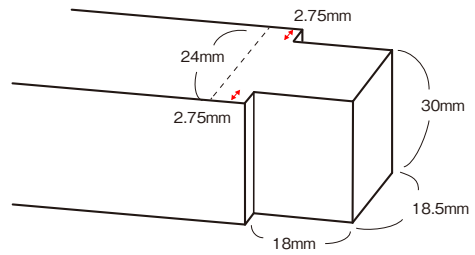


③18mmの印からさらに546mm先のところに墨付けする。ここが胴箱上面との接触部分になる。右図の赤塗り部分を参照。



手順4：糸倉との接着部分の加工

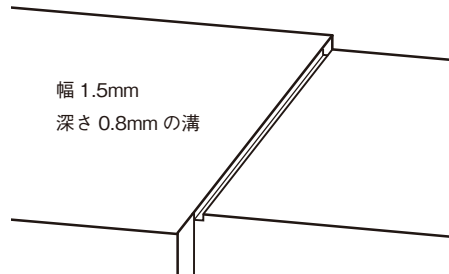
①棹の先端の墨付けした部分の両脇を、帯ノコか手ノコで2.75mm切り落とす（削る）。



②先端から18mmのところ（幅が細くなる変わり目）に溝を彫る。溝の幅は1.5mm、深さは0.8mm。

後で、ここに上駒を嵌め込んで接着する。

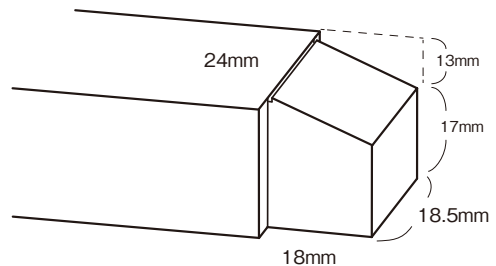
※溝を彫らずに上駒を貼り付けるという方法もあるが、それだと取れてしまいやすい。



※動画「棹1（上駒の溝作り）」参照

②先端を斜めにカットする。

※動画「棹2（頭斜め切り）」参照





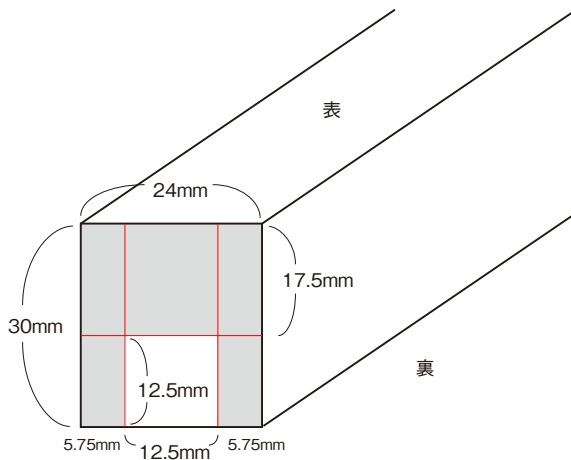
手順5：胴箱に差し込む部分（右図黄色）の成形

※胴箱の差込口の大きさが上部の入口18.5mm×18.5mm、下部の出口12.7mm×12.7mmなので（44頁参照）、棹の黄色部分の木口は、それよりやや小さめに設定している。

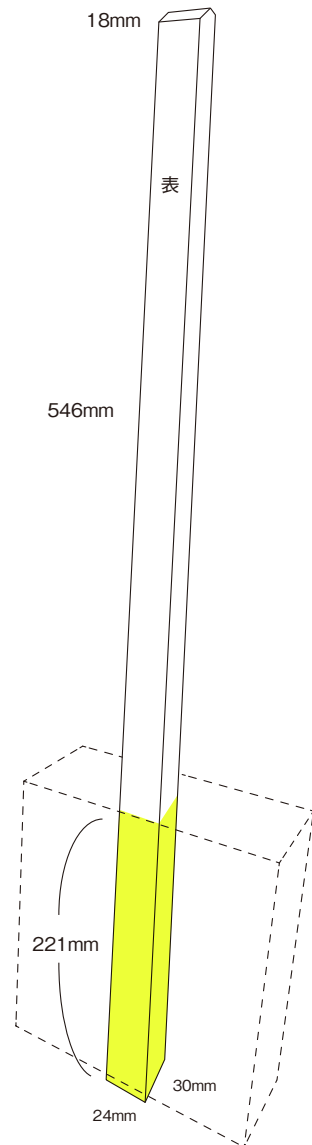
上部は18.3mm×18.3mm、下部は12.5mm×12.5mm。

①下図のように下端の木口に墨付けする。最終的に、グレー部分は切り落として棹の裏側に木口12.5mm四方の正方形を底面とした角柱を残す。

12.5mm×12.5mm角を正確にとるように心がけること。



参考：縦切りした時の木口



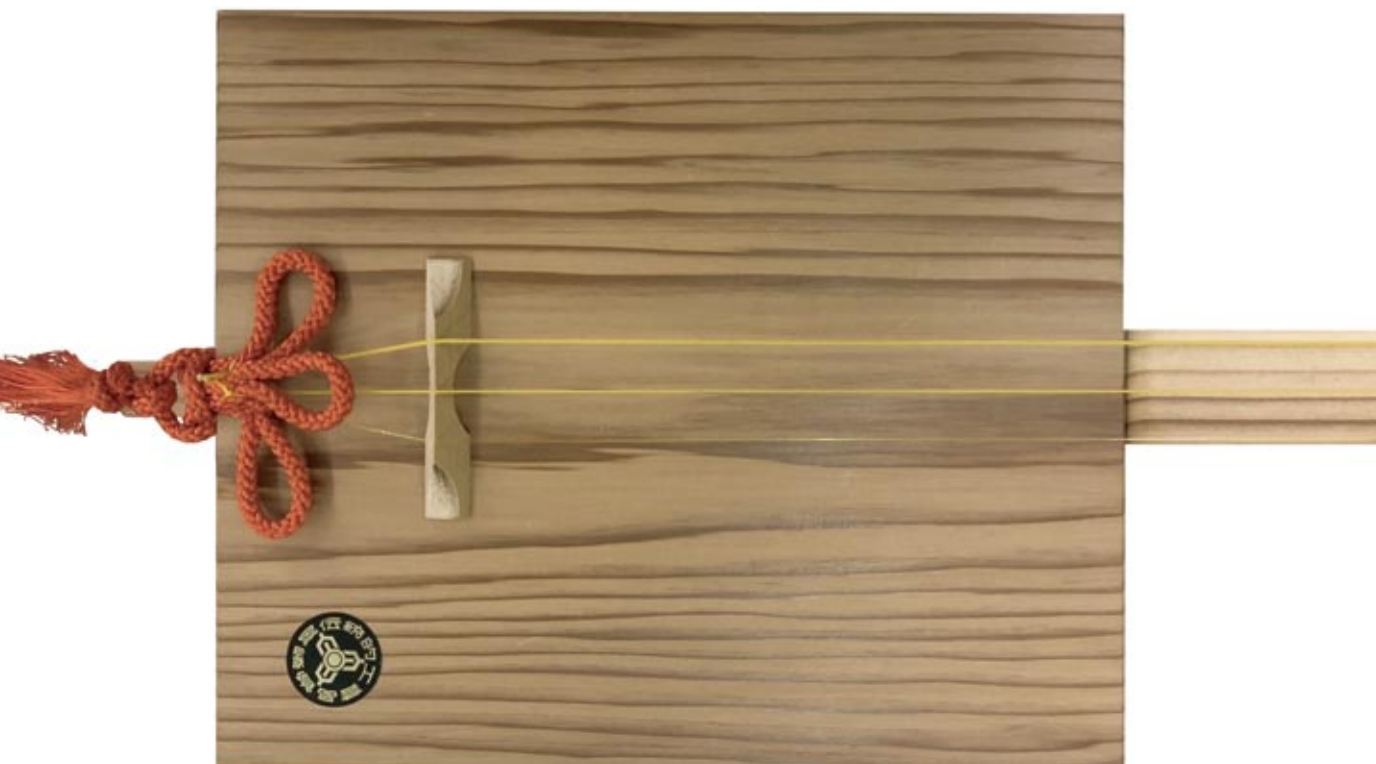
サンプルのため省略



5-4. 胴箱

ゴッタンという楽器の最大の特徴は、音を増幅させる胴箱の膜板（響板）が木の板からできているが、内部の音を外に出すための穴がないという点にある。三味線では響板に皮が用いられ、ギターには薄く大きい胴に丸い穴（サウンドホール）が開いている。しかし、ゴッタンには皮も使われていなければ、穴も開いていない。ゴッタンの胴箱は、外の空気を余分に響かせずに音をこもらせて、木がもつ本来の音だけを取り出すという不思議な機構を持っている。本当のゴッタンの音を出すためには重要な部分だ。

胴箱には角形と丸形がある。「箱三味線」とも呼ばれるゴッタンの「箱」は「重箱」に由来しているため、角形が基本的な型である。





手順1：膜板を作る (角形・丸型共通)

①膜板には、幅の広い古材料を用いる。写真のように、古民家の梁や桁などで、最低でも300mmの幅があり、節が入っていない、ひび割れがないものを選ぶ。もしひび割れがあれば反対側（芯の逆側）を使えないか確認してみる。

※材料確保の基本として、木が生えていた北側外側が1番材料、南側外側が2番材料、北内3番、南内4番の順。これらは、木の年輪の片寄りで見分けることができる。北側は固くて目が狭い。南側は柔らかくて、割れていないことが多い。



②帯ノコで荒取りをしていく。縦横はそれぞれ最低でも約250mm (大きければ大きいほど良い)。厚さは約5mmで切っていく。切る際には、途中で止めずにゆっくりと切りきってしまうこと。途中で止めてしまうとそこに筋ができてしまい、後で修正するのに苦労する。





③厚さの微調整をする。

まず、自動カンナで3.5mmくらいまで薄くしていく。
かなり薄いので、膜板の下に少し厚手の板を噛ませて一緒に削ると作業しやすい。また、下に板を噛ませないと、膜板を自動カンナの刃で叩いて割ってしまったり、段差ができてしまったりすることがある。



④仕上げにサンダーをかけて、3mm厚に仕上げる。

この際に自動カンナのナイフマークが取れて、滑らかな面が得られる。



⑤丸型用と角型用に切り分けて選別する。

どちらの型にするかは、木目の仕上がりをみて決める。
真ん中から丸型で取れるような木目のものを優先する。
小さく取れるものは角形にする。
どちらにも適さないものや、木目が偏ったものは、裏側の膜板に使うとよい。

※動画「胴箱1（膜板選別）」参照



丸型には、比較的安定して木目が綺麗に整った檜の集成材を使うこともある。



⑥膜板を手で力を入れて曲げてみて、割れないかどうかを確認する。少しでも「ピキッ!」といったら、それはもう割れる板なので、ここで廃棄してしまう。

この段階でないと、材料が生きているか死ぬかわからない。もちろん最初からヒビが入っているものは省くが、それでも良い材料が取れていないと、確保した板の量が半分以下になってしまうこともある。

そのため、最初の段階での材料の見極めが大事になってくる。 ※動画「胴箱2(膜板曲げ)」参照



〈失敗例〉

カンナをかけていると節が取れてしまう場合もある。



曲げてみたら、割れてしまった膜板。



サンプルのため省略